

# 道綱母と「風景」

## 一

日記文学の中の風景に目を止めて久しい時間が経つが、いまだに納得しうる答え方ができないでいる。ただ風景を、可視的にせよ不可視的にせよ、作者たちの視座を風景の中で捉えることはそれほど困難なことではないと思われる。それは日記という多層的な断面に、光の当て方によっていろいろな像が淨び上り、あるいは結ぶことが出来るからで、風景もまた、その断面の一つにすぎないからである。筆者の考える「風景」とは、別の問題意識をもつものであるが、それはいずれ稿を持つこととして、ここで日記文字のもつ多層的な断面の一つとしての風景描写を、作者の像と共に、筆者のための「風景」として捉えてみようとする。

『蜻蛉日記』を読んだ最初の印象が、「色」が見えない、ということであって、それからどれほどの時間が経ったのか定かでないが、その後、筆者が自分の稿をもつために読み返した時の印象にも

変化のないことに気づいた。それはなぜなのか、『蜻蛉日記』（以下『日記』と称す）作者の作歌意識と関りあいがあるのかどうか、次回へ譲るとして、この稿では先述のような立ち入り方を、この『日記』で試みたいと思う。

## 二

『蜻蛉日記』の中で見る数少ない風景（自然景）描写で、とくに雨の情景が目立つので、その辺りから見えていくことにする。

(1) 六月になりぬ。ついたちかけて長雨いたうす。見出だして、ひとりごとにて、

わが宿のなげきの下葉色ふかく  
うつろひにけりながめふるまに  
などいふほどに、七月になりぬ<sup>①</sup>（作者21才ごろ、以  
（一四〇）<sub>（下年令のみ記入）</sub>）

作者の主眼は歌にあって、とくに「うつろひにけりながめふるまに」が作者の発言の意図である。うつろう季節の発見は、いのちの移ろいを意識させるものではあるが、作者にとっては、兼家の存在を前提としたところに意識される「うつろひ」でなければならぬ。いささか脇に逸れるのだが、文中の「六月になりぬ」「などいふほどに、七月になりぬ」と、テンポの早い時間の経過は、日記の体裁をとるために書き添えたもので、原本となるものが家集なのか、手控えのようなものかは判らないが、こうした痕跡が『日記』中の前半に、とくに多く見られる。

さて、次に目を移すと、

(2) おとづれなくて、十七八日になりけり。今日の昼つかたより、

雨いといたうはらめきて、あはれにつれづれと降る(35オころ)  
(二四七)

十二月の、寒さが身にしむ雨である。

一体、作者の風景描写に「あはれ」がつきまとい、この個人的感情がわれわれの視界を妨げる。作者は「あはれ」を、「種々の角度から眺められる様々の面において使用する」というよりも、多くを語りたくないとき、いや多くのことばをもってしても表現できない感情を「あはれ」の一語で伝えようとしているのである。

この一文における「あはれ」なる雨は、雨を媒介とする作者の感情を指し示すものであって、次の一文へ繋がってゆく。

まして、もしやと思ふべきことも絶えにたり。(中略)雨風にも障らぬものとならはしたりしものを

とする激しい心の動揺を、「まして」と念を押し、兼家の昔と今の態度の相違を確認するのである。この「あはれ」は、己れへの憐愍を語るものである。

(3) 雨いたく降り、東風はげしく吹きて、一筋二筋うちかたぶきた

れば、いかで直させむ、雨間もがなと思ふままに

なびくかな思はぬかたに呉竹の

うき世のすゑはかくこそありけれ(36オころ)  
(二五三)

ここでの雨は、作者の感情を刺激する引金にはなっていない。むしろこの一文の前段、「涙こぼれて植ゑさ」せた呉竹に心寄せがある。作者が「去年の春、呉竹植ゑむと乞ひしを、このごろ奉らむ」と言ってきたが、幸福でない現在の自分に呉竹は不似合だと言つて断わつたとある。しかし相手から「いと心せばき御ことなり」と言われて植ゑさせたのだとしている。作者の意識は「あはれに、ありしところとて、見む人も見よかしと思ふ」ことに強い働きがあり、「あはれ」は作者自身への憐愍以外にもものもない。そして己れの未来の姿を想像して涙を流すのである。

前文(3)に連続して、次の雨を見る。

(4) 今日(天禄二年二月・筆者記)は二十四日、雨の脚いとのかにて、あはれなり。夕づけて、いとめづらしき文あり。「いと恐しき気色に怖ぢてなむ、

日ごろ経にける」などぞある。返りごとなし。

五日、なほ雨やまで、つれづれと「思はぬ山に」とかやいふや

うに、もののおぼゆるままに、尽きせぬものは涙なりけり。

降る雨のあしとも落つる涙かな

こまかなものを思ひくだけば(36才ごろ)  
(二五三)

春雨の情景を映したものである。日付も具体的で、日記の体裁がよく整っている。しとしとと降り続く雨を眺めて「あはれ」と感じたのは、兼家を待つ自分の心の発見があるからだ。せっかくの「めづらしき文」に対して「返りごとなし」と突き放してはみるものの、それでも訪れてくれるだろうという一縷の望みがあったはずだが、ついに兼家は現われない。絶望にも似た感情が翌日(五日)の雨の情景まで引き摺って、「尽きせぬものは涙なりけり」と直線で結ぶ。待つ心と拒絶する心、この相容れない二つの心になすすべを知らないのである。作者のできることといえばただ涙することであったといえよう。右の一文に続くことばに、「いまは三月つごもりになりにけり」とあって、「いまは」に込められた作者の万感の思いが伝わってくる。

同じ年(天禄二年)の七月、作者は二度めの初瀬詣を行っている。前回は「忍びやかにと思ひて」の旅立ちであったが、この度は「人いと多く、きらぎらし」い旅立ちであったことなどを長文でしたためている。そのときの雨の情景を眺めてみると、

(5) それより立つほどに、雨風いみじく降りふぶく。(中略)濡れまどふ人多かり。からうじて、まうで着きて、みてぐら奉りて、初瀬さまにおもむく。(中略)いみじき雨いやまさりなれば、い

ふかひもなし。  
(二九二)

といった具合に、道中の情景を書きすすめていく。父たちとの旅であったようで、「よろづにおぼゆること多かれど、いともの騒がしくにぎははしきに紛れつつあり」と、穏やかな気分を旅をしている様子が伺える。雨に触発されての涙もなく、激しい感情の揺れもない配慮があったと思われるからで、たとえば「按察使大納言の領じたまひし宇治の院」へ立寄っていること、しかもここでは「あづかりしけるものの、まうけをしたれば」とあるように、すでに一行を迎える準備が整っていたことなどから考えると、到底、父倫寧の力量では成しえなかったことと思えるからだ。作者は鵜飼に目を向け、闇の中でゆらめく篝火に目を凝らしながら「をかしく見ゆることかぎりなし」と感嘆の声をあげる。篝火のはぜる音や、鵜匠の巧みな手綱さばきにあげる一行の歓声が聞えるようである。作者はそうした風景に融け込むよりも、ひとり回想に耽るのである。故人となつた「宇治の院」領主のことは、かつて兼家と共に遊んだ宇治の地の一つの風景であったし、作者が「いかなる世にさだにありけむ」と言いたくなるほど満された時間のあつたことを確認するのである。だがそれはつらい確認であり、現在の自分をよけいに惨めにするものであることも知るのである。

(6) 九月のつごもり、いとあはれなる空の気色なり。まして昨日今日、風いと寒く時雨うちしつ、いみじくもあはれにおぼえた

り。(天禄二年、36才ころ)  
(二九六)

「あはれなる空」とはどのような空なのだろうか。また冷い風にまじって降る雨にどのような「あはれ」をおぼえるというのか。この風景は、初冬の、皮膚に感じる寒さによって心身の寂しさを促がす状態をいったものである。筆者も「あはれな空やなあ」と呟いた、あるいは訊いた経験をもつ。それは右と同じ風景の中にあつた時のことである。この時の「あはれ」も道綱母の同じように、人間的情感の中で捉えた、人間と同じ情感を投影してみる「空の気色」であつて、感興を呼びおこすほどの情緒はない。むしろ恨めしいといった対人間的感情に等しいのである。

作者は降りつづく雨に「いみじくもあはれにおぼえたり」とした。それは「すべて世に経ることかひなく、あぢきなきこち」とする潜在意識が、雨との連鎖によつたものだが、記述の表面だけを見ると雨に誘発された感情を述べているように見えるのだ。この「あはれ」もまた、不安定な立場のまま老いていく己れへの憐愍の情を述べたものである。

更に同年の十二月の記事に、

(7) しばしありて、にはかにかい曇りて、雨になりぬ。たふるるかたならむかしと思ひ出でてながむるに、暮れゆく気色なり。いといたく降れば、障らむにもことわりなれば、昔はとばかりおぼゆるに、あはれもののおぼゆれば、念じかたくて、人出だし立つ。

悲しくも思ひたゆるか石上いそのかみ  
さはらぬものとならひしものを  
(二九八)

この雨は(2)で見たのと同じ心情で捉えている。兼家の心の変化を問題にしているのだ。それでも「いといたく降れば障らむにもことわりなれば」と、一応の理解を見せるのである。だがすぐ「昔はとばかりおぼゆる」と、打ち消してしまふ。そして昔のことを考えただけで「あはれにももののおぼゆる」と涙するのである。雨の音を聞きながら、相反する感情の揺れを、作者自身を「あはれ」としか言えないようないほど惨めなのである。だがこの一文は「二十日余日あををたちたり」とする後の、訪れを約束されたものだけに、作者の逸る気持が行間に潜んでいる。そうした時、「妻戸おし開けてふと入りた」る人があつたが、「いみじき雨のさかりなれば音もえ聞こえぬ」ままに、作者の前にいる兼家の姿をとらえたのである。この時の作者の喜びの声は聞かれないが、心中を充分に察することができよう。

さて、次に目を移すと、

(8) あかつきがたに、松吹く風の音、いと荒く開こゆ。(中略) 明ければ二月にもなりぬめり。雨いとどかに降るなり。格子などあげつれど、例のやうに心あわたたしからぬは、雨のするなめり。されどとまるかたは思ひかけられず。(37才ころ)  
(三〇五)

荒々しく吹く風も、しとしと降る雨も、作者の心を波立たせるこ

とはなかった。それは兼家と共に聴く雨であり風であったからで、兼家が「例のやうに心あわたし」く出立しないのも雨によるからであると、まことに穏やかである。家人のすすめる朝食はいらないと「心よげにうちいひて」から「のどかに歩み出て」いく上気嫌な兼家を描くのは初めてであり、更に兼家の衣装にまで書き及んでいる。ここには比較的穏やかな作者がいるが、前段によると、

かかれど、いまはものとおぼえずなりにたれば、なかなか心やすく、夜もうらもなうらうち臥して寝入りたる

とするところへ兼家が来たことになる。「前なりつる人々も、みなうちとけたれば、逃げかくれ」てしまったので、作者自ら兼家を迎えたのだという。作者の言う「かかれど、いまは……」が本心とするなら、作者の穏やかな態度は、兼家に対してだけでなく、己れの人生への諦観と見るべきかも知れない。しかし作者の心情に持続性がないので、ここでの作者の、真実の姿を見抜くことはむづかしい。

(天禄三年二月)  
同年同月の他日の記述に

(9) いかなるにかありけむ。このごろの日、照りみ曇りみ、いと春寒き年とおぼえたり。夜は月あかし、十二日、雪、こち風にたくひて、散りまがふ。午時ばかりより雨になりて、しづかに降りくらすにしたがひて、世の中あはれげなり。今日までおとなき人も、思ひしたはぬこちするを、今日より四日、かの物忌にやあらむと思ふにぞ、すこしのどめたる。十七日、雨のどやかに降るに、方塞がりたりと思ふこともあり、世の中あは

れに心細くおぼゆるほどに(37才ころ)  
(三〇八)

と、日記の体裁をもった言述である。兼家の来訪を待つものだが、兼家側の物忌や方寒りが訪れを妨げているのだらうと考えることによつて「すこしのどめたる」としているのである。そのせいか激しい動揺は見られない。しかし、作者は降る雨を眺めくらすうちに「世の中あはれげ」に思えたり、「世の中あはれに心細くおぼゆる」ようになってゆくのである。なぜなのか。なぜ「世の中あはれげ」と思うのかを考えるためにはやはり前段に目を向ける必要がある。

二月八日、作者は父邸へ行った。いつものことだが、作者が父を訪ねていると、必ずといってよいほど兼家は連絡してくる。この日も弁解めいた兼家の手紙を受ける。作者も一応の返書は送るが、心情的には「いま人知れぬさまになりゆくものと思ひ過ぐして、あさましううちとけたること多く」なっているのだと言っているのである。つまり「うちとけたる」さまのまま兼家を迎えてしまったことへの弁解とも訊こえるのだが、とにかく相当な慌てようであったことは文面から伺える。

午時ばかりに「おはしますおはします」とのしる。いとあわたたしきこちするに、はひ入りたれば、あやしくわれか人もあらぬにて、向かひぬれば、こちもそらなり

とする作者の動揺は、「こちもそらなり」とするほどであったのである。

筆者はふと『無名草子』作者のいう「大齋院」という女性のこと

を思い浮べた。村上天星の皇女ということからか、また齋院という立場からなのか、いつ訪ねてもこちらが気恥かしくなるほどの気遣いを見せた生活をしていたというのである。平安時代の女性たちが、この「大齋院」のようであつたら話題になることもなかったであろう。とにかく蜻蛉作者が「ここちもそらなり」とするほどだから相当な「うちとけたる」さまであつたのだらうと思う。

さて、兼家の方は「うるはしうひき装束き御前あまた引きつれ、おどろおどろしう追ひちらして」出立して行つた。兼家がどのような感想を洩らしたかは判らないが、兼家の心中を代弁するかのようになり、「見苦しきこと多かりつると思ふここち、ただ身ぞ憂はてられぬるとおぼえける」のだと言う。兼家に愛想づかしをされたとする思いが強く働くのである。すなわち「向かひるれば、ここちもそらなり」とした感情の揺曳が、「世の中あはれ」に結ぶのである。「身を憂はてられぬる」原因が、「あさましうちとけたる」生活態度にあるとしたら、女性として最も恥すべきことと考えていたに違いない。そうした感情を引きずつたまま眺めた景色が、作者を感傷の谷間へ引きづり込むのである。引用文(9)で、作者が「すこしのどめたる」と言ったのは、この一件以来、訪れないのは兼家側の都合、つまり物忌といった理由があるからで、決して「憂はてられ」たからではないのだと自分に納得させようとしているのである。

この時代の女性たちは、自分も視られる風景の中にいることを意識した生活をもっていたはずである。それを優雅とか嗜みといったことばで規制していたのかも知れない。

雨に関する記述はまだあるが、それらは固有の風景であつて、と

くに作者の心象に結ばないので省くことにした。

### 三

自然というものを人間との交渉において観察し整備せんとする要求の起つた時に始めて生ずるのが季節<sup>⑩</sup>という意識であり、さらに春秋を対立する美として捉えることは日本固有のものでないとしても、とくに際立った心寄せがあり、また寄り添うようにして生きる姿が頭者に見える時代でありながら、道綱母は、風景(自然景)をありのままの風景として眺めるというよりも、むしろ個人的な意識の働きが強く作用していることに気づかされる。

つづいて雪の景色から見ていこう。

(10) 十一月に、雪いと深くつもりて、いかなるにかありけむ、わりなく、身心憂く、人つらく、悲しくおぼゆる日あり。つくづくとながむるに、思ふやう

ふる雪につもる年をばよそへつつ

消えむ期なき身をぞ恨むる

など思ふほどに、つごもりの日、春のなかばにもなり(35才ころ)にけり。(三三〇)

(安和二年) (天禄元年)

短文の中に、十一月から三月ごろの期間を指示するのだが、実際は十一月のある日の心情を述べたにすぎない。いく度か触れたように、このように日記の体裁をとるための無理があつたと思われる。

この雪景色にはかなりの積雪のあったことが判るだけで、美しいとか、きれいだとかといった当り前の描写はない。もとより作者には雪景色を問題にするつもりなどなく、雨の項(2)で見たと同じように、兼家の来訪に係る景色としての雪である。「人つらく」、兼家への恨みが増幅され、それによって「消えむ期もなき身をぞ恨むる」と、己れを強く意識するのである。

次のはどうであろうか。

(11) 今日(二十三日)、まだ格子はあげぬほどに、ある人起きはじめて、妻戸おし開けて「雪こそ降りたりけれ」というほどに、鶯の初声したれど、ことしも、まいてこちも老い過ぎて、例の、かひなきひとりごともおぼえざりけり。(37オころ)  
(三〇三)

『日記』の下巻の初めに位置するところで、まず「天禄三年といふめり」と明記し、具体的な日付のもとに記入されていく。

さて「雪こそ降りたりけれ」と侍女の声、そこへ折り良く鶯の初声と、作者に伝えられた春の景色は聴覚によるもので、視覚で捉えた景色はないが、うぐいすの初声に何の感興もなかったというのか。作者がわざわざ「こちも老い過ぎて」と弁解するところから見ると、詠じた歌はあったと思う。この『日記』の主題に合わないと思っただのか、あるいは記載するほどの出来ばえでないと考えたからではなからうか。文中の「ことしも」の意がよく伝わらないのだが(去年の同じ情景と、同じ心境をもったというのなら別だが)、「今までよりも一層」ととする解釈に従っておく。では作者が急に老い

を感じたのはなぜだろうか。後文(二十五日の段)の司召の記述によれば、兼家が大納言になったが、

わがためは、ましてところせきにそあらめと思へば、御よろこびなど、言ひおこする人も、かへりては弄ずるこちして、ゆめ嬉しからず

であると言ひ、多忙を理由に訪れない兼家に対して、以前ほどの感情の高ぶりは見られない。反対に兼家の方から「なにごとかある」のかと尋ね、どうして手紙をくれないのかと言う。こうしてみると「ことしも」は、作者の意図的なことばであり、心の老いというよりも、むしろ人生を諦観しようと、自分の中で反芻する作者の意志的なものを感じるのである。

(12) 今朝も見出だしたれば、屋上の霜いと白し。わらべ、昨夜の姿ながら「霜くちまじなはむ」とし騒ぐも、いとあはれなり。

「あなさま、雪恥づかしき霜かな」と口おほひしつつ、かかる身を頼むべかめる人どもうちきこえごち、ただならずなむおぼえける。(36オころ)  
(二九七、八)

ここは「雪恥づかしき」ほどの白い霜景色の中で、霜やけの呪いをしようとする騒ぐ幼い召使いたちの姿を「いとあはれ」なる風景として捉える。前段には

すべて世に経ることかなく。あぢきなきこち、いとすころなり。(中略) 明くれば起き、暮るれば臥すことにてあるぞと書いているが、このもの言ひは『日記』の序とされる「かくあり

し時過ぎて、世の中にいとものはかなく………たた臥し起き明かし暮らす」と呼応する一文であると思われる。とにかく、兼家の訪れない歎きを託つこと「二十日になりたり」とする状況が前段にあつての霜の景色であるからして、「いとあはれなり」とする作者の心情がいかなるものか理解されよう。「かかる身を頼」みとする召使たちへの憐愍の情が「あはれなり」となり、改めてわが身を「たたならずなむおぼえける」ことを意識するのである。雪も霜も白い風景は、作者の精神を浄化させるに至らなかつたのである。さて、<sup>(九六四)</sup>康保元年の秋、作者は母を亡くした。その歎きには徒ならぬものがあり、半死半生の状態であつたことが述べられている。

(13) いまはいとあはれなる山寺に集ひて、つれづれとあり。夜、目も合はぬままに、嘆き明かしつつ、山づらを見れば、霧はげに籠をこめたり。京もげにたがもとへかは出でむとすらむ、いで、なほここながら死なむと思へど、生くる人ぞいとつらきや。<sup>(29才ころ)</sup>  
(二六七)

母の臨終、作者の異常ともいえる状態を「あはれなる山寺」の中の情景として描く。半死半生から落着きを取り戻した作者の目に映じた墨絵のような景色に対しての感動は伝えない。それは作者の目に霧の景色が美しいと映じたからではないからだ。最初の傍点の「げに」であるが、霧は歌さながら籠にたちこめていて、とするように、強いて引歌を意識する必要があるか。『全注釈』によると「籠を籠める霧は、人を山から下りさせまいと阻んでいるかのよう

に見える。そう見立てた霧の意志を肯定する気持」とあるように、全くその通りであつて、果してわれわれが引き合いに出す古歌が、作者の意識にあつたとは言ひ切れない。また山寺で見る霧の景色はここだけのものではない。二つめの「げに」で、作者の意識を確認できるのである。つまり霧は山の麓まで隠す、その麓には京がある、その京に果して自分を待ち受けてくれる人(兼家)がいるのだろうか、いるはずがない、だからこのまま「死なむと思」うが、自分を頼りとする人(道綱)の存在が死を阻むのだ、とする自問自答がある。見えない霧の向うの自分と問答するのである。霧は作者の存在そのものとして捉えていたのではないか。また頭初の「あはれなる山寺」とは、母への慕情につながるゆえの山寺である表現とみる。<sup>(九六八)</sup>安和元年九月、『日記』の上では初めての初瀬詣となるが、その帰路、作者は次の風景を眼前に置く。

(14) 宇治の川に寄るほど、霧は来しかた見えすたちわたりて、いと おぼつかなし(中略)霧の下より綱代も見えたり、いふかたなくをかし、みづからはあなたにあるべし。<sup>(33才ころ)</sup>  
(二九九)

「いふかたなくをかし」とする風景は、霧の向うにある兼家の姿を捉えているからであつて、作者の逸る心が伝わってくるのである。山寺で眺めたものとは違って、確実に兼家の存在を意識させた霧の風景である。この段は長文で、作者の思い入れのほどが察せられよう。

さて、この時の初瀬詣は、「年ごろ願ある」からだとしている



が、真意は別にあると見る。作者が「忍びて思ひ立ちて」と三度も繰返えす理由は、兼家側に「これより女御代出で立たるべし、これ過ぐしてもるともにや」とする事情があったことによるものだが、結局は「わがかたのことにしあらねば」として出立する。兼家の申し出を無視した以上、きらびやかに「ののしりてとおぼゆ」ほどの旅はできないのである。女御代（超子）は兼家の娘であるが、時姫が生んだのであるから、作者が「わがかたのことにしあらねば」とするほど嫉妬の焰は大きいものと想像できよう。「日悪しければ」、それでも出立しようとする作者の動揺は相当なものと思われる。

兼家の意見を無視するようにしての旅立ちであっただけに気持は晴れず、目に止まるもの「あはれに見ゆ」と繰返すのである。後悔と嫉妬が作者を苦しめたものと思われる。「よろづにつけて涙もろくおぼ」えるのも「あはれなる」ものも、作者の中では一つに重なり合うのである。そうした道中「文ささげてくるもの」がいて、兼家からの「帰るべからむ日聞きて、迎へだに」とする手紙であったが、いつものことながら作者は反対のことばを伝えるのだ。「これよりも深くと思」うので帰る日など決められないというのである。思いがけない兼家からの手紙はまちがいに作者の気持を明るくしたし、したがって引用文(14)の心情に繋がっていくのである。「雨」の項(5)で触れたように、作者が「いかなる世に、さだにありけむと思ひつづく」縁よすがとしたように、この旅の印象は、ながく作者の中に生きつづけたであろうと思われる。

さて天禄元年七月、このころの作者は「明くれれば言ひ、暮るれば嘆」く生活であったという。嘆きの原因は「近江」という女性の

存在を知ったからである。召使たちの口から噂を聞くに及ぶや、「はらからといふばかりの人にも知らせず、心ひとつに思ひ立ちて」石山寺へ向った。「ともかくも思ひわかず、ただ涙ぞこぼるる」ほど、作者は取り乱していたのである。おそらく徒であったと思われる。この辺りの様子は、まるで『うたたね』の阿仏尼を見るようである。道中「いとわびしくも苦しくも、いみじうもの悲しう思ふこと類なし」とするほど、波立つ自分の感情を押えかねているのである。寺について後は、「臥しまろびてぞ泣かるる」ほどで、ひたすら「身のあるやうを仏に申すにも、涙に咽ぶばかりにて、言ひもやられず」状態であったと記す。作者の激しい独白の後に見る風景は、さぞや美しく、こころ洗われる思いがしたであろうと思いがながら、作者の視線を追ってみたのである。

(15) 外のかたを見出だしたれば、堂は高くて、下は谷を見立えたり  
(中略)二十日月、夜更けていと明くなれど、木陰にもりて、  
ところどころに來しかたぞ見えわたりたる。  
(三三九)

作者が涙に咽んだ後に目を止めた風景であるが、とくに「來しかた」へ視線を向けたのは印象的である。以下長文の風景が展開されるが、作者を「涙のかぎりぞ尽くしはつる」状態にさせた風景は次によるのである。

(16) 夜の明くるまみに見やりたれば、東に風はいとのどかにて、霧  
たちわたり、川のあなたは絵にかきたるやうに見えたり、川づ

らに放ち馬どものあさりあるくも、遙かに見えたり、いとあはれなり。二なく思ふ人をも、人目によりて、とどめおきてしかば、出で離れたるついでに、死ぬるたばかりをもせばやと思ふには、まづこのほだしおぼえて、恋しう悲し。涙のかぎりをぞ尽くしはつる。(35才ころ)  
(二四一)

朝霧の向うに見える風景を「絵にかきたる」ようだという。山の冷い空気が作者を鎮静させたかに見えたが、そうではなかったのである。そして「いとあはれなり」と呟く。作者が示した遠景の何が「あはれ」と感じさせたのだろうか。それは「絵にかきたる」風景に対しての感興を表わすものでなく、「二なく思ふ人」への懐い入れの深さを伝えるものとみる。たとえ誘発されるものがなくても母性は働くものだが、ここでは作者を「恋しう悲し」とさせるものがあつたとすると、それは放ち馬の群れではなかったか。親子連れの間でも見つけたのだろうか。しかし、作者が「涙のかぎり尽くし」て泣いたのは、子供への思慕だけのものではあるまい。もっと複雑に交錯するものがあつたと思われるのである。

かつて「町の小路の女」に見せたような直接的で、激しいもの言いがけないので、年齢を重ねた分だけ内に秘められるようになったのかと思つていたら、実際はもっと激しく、感情の裂れ目の大きさの分だけ行動するのである。

さて、天延元年八月、『日記』によると、作者の意志で、京の郊外である広幡中川辺りに居を移す。新居から展眺した風景を次のように書き止めている。

(17) 九月になりて、まだしきに格子を上げて見出だしたれば、内なるにも外なるにも、川霧立ちわたりて、麓も見えぬ山の見やられたるも、いともの悲しうて、

流れての床と頼みて来しかども  
わがなががははあせにけらしも

とぞいはれける。(38才ころ)  
(三四八)

作者はどのような風景を、たちこめる川霧の向うに見ていたのであろう。色褪せた愛の糸をもう一度染め直そうと、この地へ移ったわけではあるまい。何らかの決心が転居という形をとったのだから、兼家の「あとをたちたり」は、現実のものとして受ける止める必要があつたのに、作者はなお川霧の向うにある風景を、確かな手ごたえのあるものとして捉えようとしている。それができなくて「悲しうて」と呟く。転居の記述を境にして、『日記』の日付けは再び大まかな書き方に変つていったことだけは事実で、作者の心境と無関係ではないと思う。

#### 四

道綱母は、美的原則が支配する時代にあつて、その固有の風景を『日記』の中へ引き込むことはしなかった。それは『日記』作者としての意識が、作品の主題に添った風景を用意したのである。ただし作者が宮廷女房の生活をもつたとしたら、「あるかなきかのこちする」人生を、別の筆致で表現したであろうことは確かであ

る。

作者は『日記』の中で、桜花を正面に見据えることはなかった。花ということばが最初に出てくる場面は短くて、

(18) 前栽の花いろいろに咲き乱れたるを見やりて、臥しながらくぞいはるる

ももくさに乱れて見ゆる花の色は

ただ白露のおくにやある

とうちいひたれば、(22オころ)

(二四七)

と、咲き乱れた花が夫婦喧嘩の恰好の材料となっただけで、それ以上、花への意いはない。作者もまた負けじとばかり返歌する。この花は草花であろうか、声なき夫婦喧嘩の材料を供しただけである。

(19) つくろはせし草なども、わづらひしよりはじめて、うち捨てたりければ、生ひこりていろいろに咲き乱れたり(29オころ)

(一六九)

亡き母と一緒に「つくろはせし」花が咲き乱れているというのである。「生ひこりて」とあるからこの花はもろん草花のこと。作者にとつては悲しみの増す風景であつたらう。

次は天禄二年夏、作者は鳴滝詣をする。この寺には、兼家と「いにしへもろとも」にのみ、時々はものせし」とした格別思い入れの深い場所であつた。今それを懐うと「道すがら涙もこぼれゆく」のだという。僧坊に着いて先ず目についたのは、

(20) なにとも知らぬ草どもしげき中に、牡丹草どもいと情なげにて、花散りはてて立てるを見るにも、「花も一時」といふことを、かへしおぼえつつ、いと悲し。(36オころ)

(二六二)

とする景色であつた。牡丹はただ美しいというだけでなく、大きくて豪華さを感じさせる花であるだけに、花弁を散らした姿はいかにも「情なげに」見えたことであろう。だから「花も一時」という言葉がびったりと合うのである。こうした情景に目を止めたのは、歌人としての意識というよりも、作者自身の現在を表現するに最もふさわしい風景でなかつたらうか。だから「いと悲し」と念を押すのである。牡丹は己れを見極めるよい材料であつたのだ。こうして見ると、作者は現在と比較できる過去をもっていたのであつて、それを喜びとし、現在を慰める、という心境にまで至っていないようである。作者にとつて過去との比較は、悲しみを増幅させるだけののであつたようだ。

(21) このごろ、庭、もはらに花降りしきて、海ともなりなむと見えたり。

今日は二十七日、雨昨日の夕より降り、風残りなく花を払ふ。

(37オころ)

(三二四)

右は『日記』の記述からみると、天禄三年の二月ということになる。花は桜花であるが、庭一面に降りしきる花を海に見立てながら、なんの感慨も洩らさないのだ。散る花を見ながら、牡丹に預けたような心寄せがここにはないのである。事実を記す、ただそれだ

けである。

⑳ あるところに、忍びて思ひ立つ。「なにばかり深くもあらず」

といふべきところなり。野焼などするころの、花はあやしうおそ  
きころなれば、をかしかるべき道なれどまだし。(38才ころ)

(三五五)

これは天延二年の初春、<sup>(九七四)</sup>「忍びて思ひ立つ」た道中を語るものである。「あるところ」とは具体的に判らないが、「御燈明など奉りて、一数珠ばかり」とか「法師の坊にいたりて」とあるから、いずれかの山寺であろう。本来は「をかしかるべき道」ではあるが、今はまだ花もなく「鶯だにおとせず」とあるので初めて通る山道ではないと思われる。「忍びて思ひ立つ」とあるが、誰に対してなのかよく理解できない。記述通りの天延二年なれば、兼家が「あとたちたり」とした後の生活であるから(経済的援助を受けていたとは思わうが)、以前のように憚るものがないと見るのだが。身体的な苦痛であろうか、道中の苦しさを「かからである人もありかし、憂き身ひとつをもてわづらふにこそあめれ」を呟く。「憂き身ひとつを」云々というのをみると、精神的な意味も含まれるようだが、自ら求めて居を移した場所においてもなお人生観照の域に到ることができなかつたのだとしか言いようがないほど、精神の昇華が見られない。この段が天延二年のものかどうか疑いは残るが、いままし作者の視点を追うことにする。

㉑ われはのどかにてながむれば、前なる谷より、雲しづしづと上

るに、いともの悲しうて、

思ひきや天つ空なるあまぐもを

袖してわくる山路まむとは

とぞおぼえけらし。

夜明けは雨で、供の者であろうか「簑、笠や」と騒ぐ声をよそ目に、作者はここでも孤独の時間をもつ。ここでも、といったのは、われわれは幾度か同じような風景に遇っているからだ。とにかく作者を「悲しう」させたのは雨の景色である。持ち切れないほどの悲しみを抱いて来たとしても、また背負えないほどの苦しみを背負って来たとしても、佛と向き合ったとき心の安寧が保たれ、あるいは精神の浄化が得られたのであればまだ救いがあったろう。作者の場合にはそれが見られないのである。むしろ悲しみや苦しみを再確認しながら、あるいは風景の媒介によつて更に重くしながら下山するように思われるからである。これらは信仰のあり方に問題があるのだが、それを作者に問うのは酷といえよう。当時の現世利益的な信仰の形からいえば無理からぬことであるからだ。

この『日記』の主題がどうであれ、桜花に寄り添う作者の姿が見られないのは残念である。では月に対してはどうか。

㉒ さて、昨日今日は関山ばかりにぞものすらむかしと思ひやりて、月のいとあはれなるに、ながめやりてゐたれば(30才ころ)

(二七四)

月が「あはれ」に見えるとはどういうことか。いうまでもなく月

を人間的情感の中で捉えているのであって、作者の中に「あはれ」と感じる要因があるからだ。ここでは眺める月の向うに姉の姿を見ているのであって、とくに「あまたある中にたのもしきものに思ふ人」であっただけに、姉の旅立は「心細しと思ふにもおろかなり」とする要因をもっていた。この「あはれ」は、姉に対しての愛情と思慕の念を表わしたもので、姉もまた自分と同じ懐いで眺めているだろうした気持が働いている。

次は、先に触れた石山詣の帰路の風景である。「近江の女」の一件で家を飛び出し「ただ走りてゆきもて」行った石山寺で「泣き明かし」ての帰路は、先述した如く、精神の浄化どころか、波立つた感情を引きずつたままの姿しかない。

(29) 空を見れば、月いと細くて、影は湖の面にうつりあり。風うち

吹きて湖の面いと騒がしう、さらさらと騒ぎたり。(35才ごろ)  
(二四二)

船の進行と共に捉えた風景である。作者の目の位置は低く、湖面に影を落した月光は波によって光の面積を広げる。波は湖面を走るように音を立てる。作者はこうした静かな風景の中に身を置きながら、自然と一体になることはなかったのである。作者の情を捉えたのは、同船の「若きのをこ」たちの歌にあった。「声細やかにて面瘠せにたる」という歌がどのような内容をもつものなのかは判らぬが、激しい感情の波が作者を襲ったのである。作者は「つぶつぶと涙を落」したという。いったい石山詣にどんな意味があったのだらうかと言いたくなるほどの様子である。

(九一五)  
天延二年正月、道綱大夫の「雑色のをのことも、離火すとて騒ぐ

を」よそ目に、作者は一層の孤独の中に身を置く。

(20) やをら、端のかたに立ち出でて見出したれば、月いとをかしかりけり。東さまにうち見やりたれば、山霞みわたりに、いとほのかに、心すごし。柱に寄り立ちて、思はぬ山なく思ひ立てれば、八月より絶えにし人、はかなくて正月にぞなりぬるかしとおぼゆるままに、涙ぞさくりもよよにこぼる。さて、

もろ声に鳴くべきものを鶯は

正月ともまだ知らずやあるらむ

とおぼえたり。(39才ごろ)  
(三五三)

京の郊外へ居を移して迎えた新年の風景である。月の光に誘われるように部屋から出て眺める新春の情景は、独りで眺めるには寂しすぎる風景であったろう。作者は「いとをかしかりけり」月に心を寄せようとしないで、鶯を詠んだのである。しかも鶯の鳴く時間帯でない風景の中で「正月ともまだ知らずや」というのである。これは技巧だといってしまえばそれまでだが、実は次の一文と合わせて考えてみるとよいのではないかと思う。

睦月の十日あまり霞みわたれる山の方を見いだして、秋よりたえにし人のはかなくて、春にもなりぬかしと思ひつづけて

前右近大将道綱母

諸声になくべき物を鶯は

睦月ともまだ知らずやあるらむ(国歌大観)

『玉葉和歌集・恋四』に載せられたものである。歌は同じだが詞書による風景と『日記』のものと大きな違いを見出す。『玉葉』の詞書には時間を示すものはないが、必ずしも晝の風景だとはいえない。「霞みわたれる山」は、京都では昼間でも眺められるからである。やはりこの歌は、『日記』のもつ風景の中で詠まれるべきものではないと見る。また『日記』では、情景を述べたあと、「さて」という接続詞で歌を繁ぐのは此処のみであるが、この「さて」によつて、作者の意<sup>おも</sup>いが休止していることに気づくのである。

作者が『蜻蛉日記』をまとめるに当り、かなりの量の材料を持っていたことは充分に考えられる。仮に、家集があつて、その中にさきの『玉葉』のものがあつたか、あるいは『日記』のものがあつたかは判らないが、そのいづれであつても、われわれに異なる風景を見せてくれたことは事実である。これは日記文学作者たちの発見であり、ひそかな快感としたであらうと思う。

さて、作者が見せてくれた『日記』の風景の中へ立ち戻るとしよう。作者は泣いた。それも「涙ぞさくりもよよにこぼるる」ばかりの泣き方である。確かに眼前の風景の向うに兼家の姿を見ている。それはなつかしいという感情ではない。「八月より絶えにし人、はかなくて正月にぞなりぬるかし」とする、絶望にも似た感情のほとばしりが「さくりもよよに……」なのである。待つ女の哀れさを最も強く感じさせる場面である。

『日記』の中で、ほととぎす、ひぐらし、蟬なども描かれているが、作者の心を動かすほどの記述でないので、この稿では取り上げていない。これから触れる風景は、なに気なく眺めればそれまでの

もの、といった風景であるが、筆者には通り過ぎることができなかつたのである。

(2) このごろ、空の気色なほりたちて、うらうらとのどかなり。暖

かにもあらず、寒くもあらぬ風、梅にたぐひて鶯をさそふ。鶏の声など、さまざまなごう聞こえたり。屋の上をながむれば、

巢くふ雀ども、瓦の下を出で入りさへづる。庭の草、氷に許さ

れ顔なり。

(三三二)

(九七三) 天祿三年の春、『日記』の下巻に位置する風景である。前後の文

から抜け出たような風景なのである。まるで額縁におさまった淡彩風の画を見るようであるが、実のところ遊びのない筆遣いの画を見るようである。この風景が作者の眼前のものだとしたら、まことに穏やかな顔をした作者の姿を見たような気がする。今までに見たことのない表情がある。ではこの風景の向うに見せた作者の、穏やかな姿の原因はなにかを考えてみることにしよう。

前段には兼家と共に過ごす時間がある。そこには作者の拗ねる姿も、頑なな態度も見られず、「小さき人」(養女)に対する共通の話題をもったようである。兼家が近日中に「小さき人」の装着の式を取り行くと約束したことに触れているが、それに対して作者の発言はない。兼家は気嫌よく「院へまゐらむと、ののしりて」出て行く。こうした一連の記述の中で、作者を穏やかにさせている条件を探すとすれば、養女の装着のことがあげられよう。しかし本命は他にあると見る。それは「憎しと思ふところ」の火災ではなかった

か。この「憎しと思ふところ」の人が「近江の女」であるとは断定できないが、作者にとって不快な存在であることにはまちがいない。かつて「町の小路の女」が兼家の寵愛を失ったことを知ったときの作者は「人憎かりし心思ひしやうは、命はあらせて、わが思ふやうに、おしかへしものを思はせばや」と思ったと告白しているように、今回の火災のことは、作者の心を和ませる大きな要因であったと考えられる。火事の記述後の兼家に対しては、物忌であるのに文を寄こし、しかも「なにくれとこまやか」なものであったこと、また方塞りが過ぎるとすぐ作者の元へ来てくれたことなどを書いているのを見ると、作者を穏やかにさせる条件が続いていたことが判る。

ここでいま一度、先ほどの風景に立ち戻ってみると、はじめに「このごろ」という漠然とした時間の設定がある。これを具体的にどう捉えたらよいのか。前段で、兼家が車から下り立ったときの様子を「紅梅のただいま盛りなる下よりさし歩みたるに」と描写するように、ここには「うらうらとのどかなり」とする気配は感じられる。では「このごろ」とはこうした時間をも含むのであろうか。記述の順序から見ると、仰々しく出立した兼家を見送った後に目を止めたかのように記している。もし後者であるとすれば、兼家の出立は「日暮れにけり」とあるからこれに合わない。なぜならば、この風景には太陽の光を感じるからである。また前者の情景を含むものであるとするならば、なぜこの位置に額縁の画のような風景を挟み込んだのか判断に迷ってしまう。『日記』中見せた風景の中で、穏やかで、しかもやさしい目を向けている作者を見たのはこれが初めてである。穏やかにさせる、そうした感情の余韻が作者を饒舌にし

てしまったというのか。筆者には素直に眺めることのできない風景である。また仮にこの一文が脱落していても、作者の心情を損うことなく前後の文脈を繋ぐことができるのである。

## 五

以上、道綱母が見た風景を眺めて、先ず考えたことは、風景には沈静させるものと昂奮するものがあるということである。道綱母の場合はあきらかに後者である。ただそこには作者の目に現実と虚構の二重写のあることも否定できない。

自然は、こちらから見た目だけで相手からの切り返しがないので感情移入がしやすく、また人間的情感の中で捉えることが容易であることはすでに『日記』の中で見た通りである。その多くは風景を前にして、そこで捉えた季節や空間を通り抜けるようにして作者は現実の営みをもった生活を視ようとした。『日記』の中の風景は、道綱母の人生と不可分の関係にあって、より具体的な事象（たとえば雨）を示すことで、作者の心象風景としていった。それはまた、どんな形であれ現実の営みの中の作者の顔に「そらごと」でないことを示す手立てであったと考える。

同じ風景を眺めながら、こうも違うのかと思うものに『更級日記』がある。『更級』作者もまた初瀬詣などを行っているのだが、その時のものに次の一文がある。

春ごろ鞍馬にこもりたり、山ぎは霞みわたり、のどやかなる

に、山の方より、わづかにところなど掘りもて来るをかし。出づる道は花もみな散りはてにければなにもなきを、十月ばかりに詣づるに、道のほど山のけしき、このころは、いみじうぞまさるものなりける。山の端、錦をひろげたるやうなり。たぎりて流れゆく水、水晶をちらすやうにわかかへるなど、いづれにもすぐれたり。(中略)

(石山語・筆者付加)

よもすがら雨ぞいみじく降る。旅居は雨いとむつかしきものと聞きて、葎をおしあげて見れば、有明の月谷の底さへくもりなくすみわたり、雨の聞こえつるは、木の根より水の流るる音なり(以下初瀬詣とつづく)。

省略部分の多い引用となったが、ここには作者の涙も溜息もなく、切れめなく示される情景に、つまり『更級』作者の歩調に合わせて追体験できる風景がある。詠み込まれた歌も文脈と溶けあっているといくのである。いまここで『更級』の風景に立ち入ることはできないが、いずれにせよ日記作者たちは、ただ経験した風景をそのまま書き写すというのではない。そこには作者たちの意識が意図的に働いていることを認めねばならないのである。道綱母の場合にはそれが強い。道綱母が季節の移ろいを発見することは、いのちの移ろいを知ることであり、それはまた兼家との愛の喪失を確認することでもある。それでも作者は風景の向うを見ようとした。不確な影でしかないと知りながらも風景の向うにあったものを追い求めたのである。そうした行為こそが「そらごと」でない人間の一面であり、哀しい女の性であることとして書き止めておきたかったのである。

さて道綱母が、風景によって精神の浄化を図る、あるいはそこに到る、といったことは認められないのであるが、それでは作者が精神の浄化をどのような方法で行っていたのであろうか。あるいはそうしたことに無関心であったのだろうか。作者が『日記』を記すに到ったのは「そらごと」でない実人生を、つまり愛の葛藤を描くことに主たる目的があった。ゆえに己れの精神の浄化を云々する意識はこの『日記』には認められないのである。作者の自負は詠歌する己れの感覚にあった。よって精神の安寧、あるいは浄化を行う方法といえ、それは三十一文字に密着する作者が、己れの感覚を信ずることによってのみはじめて成し得たのであると考えるのである。筆者の目に点じられた道綱母の風景は、「あはれなる私」の視覚でぬ風景が多く存した。そして道綱母が、「あはれなる私」の視覚で「あはれなる風景」を眺める、あるいは捉えたとき、そこには現実とは対照的な「幻視の風景」が浮上し、作者固有の世界を構成している、筆者には見えるのである。

#### 注

- ① 引用文はすべて『日本古典文学全集』(小学館)を用いた。なお末尾の(一)左に位置するの数字は頁数を示すものである。
- ② 岡崎義恵著『美の発見―あはれの考察―』
- ③ ②と同じ―季節感の展開―
- ④ 柿本契著『蜻蛉日記全注釈』(角川)
- ⑤ ①の一六七頁。④の一四七頁。
- ⑥ ①に同じ、三四九―三五〇頁。